



Title	アイヌ語幌別方言における名詞化辞の文法化
Author(s)	高橋, 靖以
Citation	北方言語研究, 8, 107-114
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68732
Type	departmental bulletin paper
File Information	06takahashi.pdf



アイヌ語幌別方言における名詞化辞の文法化

高 橋 靖 以

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

1. はじめに

本稿では、アイヌ語幌別方言の証拠性に関わる名詞化辞について分析をおこなう。アイヌ語の証拠性に関わる名詞化辞の用法には方言差がみられる。以下では、幌別方言の証拠性に関わる名詞化辞において、補文節と副詞節のマーカーとしての用法がみられることを指摘する。さらに、文法化という観点から上記の現象について考察する。

2. 証拠性を表す名詞化辞の一般的用法

証拠性 (evidentiality) は情報のソースを示す言語カテゴリーと定義される (Chafe and Nichols 1986, Aikhenvald 2004)。類型論的観点から、証拠性には視覚 (visual)、視覚以外の感覚 (non-visual sensory)、推論 (inference)、仮定 (assumption)、伝聞 (hearsay)、引用 (quotative) というパラメータが設定されている (Aikhenvald 2004: 63-64)。

アイヌ語における証拠性の表現には名詞化辞 (nominalizer) が用いられる (金田一 1931、金田一・知里 1936、浅井 1969、Refsing 1986、田村 1988、佐藤 2008)。幌別方言の証拠性を表す名詞化辞は、siri (視覚による認識)、humi (視覚以外の感覚による認識)、ruwe (証拠に基づく確定的な認識)、hawe (発声による認識) の 4 種類である。

アイヌ語において、証拠性に関わる名詞化辞は補文節のマーカーとして機能する。以下に幌別方言の例を示す¹。

- (1) [a-kor ainu a-wenokbare **shiri**]
 INDEF.TR.SUBJ-持つ 人間 INDEF.TR.SUBJ-不孝をする NOM
 a-eshikarun chiki tu kishnu nupe
 INDEF.TR.SUBJ-思い出す CONP 二つの かすかな 涙
 a-yaikoranke.
 INDEF.TR.SUBJ-みずから落とす
 「私は父親に不孝をしていることを思い出し、少し涙を流し (shiri は「不孝をする」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1966b: 246)

- (2) [a-kishma **humi**] yupke rok be
 INDEF.TR.SUBJ-つかむ NOM 強い VP NOM

* 本稿は「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班平成 26 年度第 2 回研究会 (国立国語研究所、2015 年 1 月 10 日) での口頭発表の一部に加筆・修正をおこなったものである。

¹ 以下に示す幌別方言の例文の表記は、引用文献の表記に従った。引用文献の表記は音韻表記とは性格の異なるものである (例えば /siri/ は shiri と表記されている)。なお、例文の理解を容易にするため、議論の焦点となる補文節と副詞節に [] を付し、訳文を変更した。

Atuiyaumbe rarak konru ne a-tekbosore
 アトゥイヤウンペ なめらかである 氷 CMP INDEF.TR.SUBJ-腕を抜けさせる
 「つかまえた手応えは確かであったのに、アトゥイヤウンペ（人名）はなめらかな氷のように私の腕を抜けていった（humi は「身体をつかまえる」という感覚の認識を表す）」（金成・金田一 1966a: 309）

- (3) [a-ewak shiror pirika **ruwe**] an-erayapka,
 INDEF.TR.SUBJ-住む ところ 良い NOM INDEF.TR.SUBJ-感心する
 「私は住まいの美しい様子に感嘆した（ruwe は「住まいが美しい」という確定的な認識を表す）」（金成・金田一 1966b: 83）

- (4) [kamui rametok katkor **hawe**] a-oyanene na.
 神 勇者 振る舞う NOM INDEF.TR.SUBJ-残念に思う FP
 「私は神の如き勇者がそのように言うことを残念に思う（hawe は勇者の発言に基づく認識であることを表す）」（金成・金田一 1964: 336）

3. 副詞節のマーカ―としての名詞化辞

幌別方言においては、証拠性を表す名詞化辞が副詞節のマーカ―として機能する²。アイヌ語の中でも詳細な文法記述が公刊されている沙流方言においては、類似の現象は報告されていない（田村 1988）。

3.1 副詞節のマーカ―としての siri

副詞節のマーカ―としての siri の例を以下にあげる。

- (5) kamuineambe naanipakbe a-ekarkar shiri okai
 神である者 今にも INDEF.TR.SUBJ-する NOM ある
 rok be, a-tak ko [neiambe kusu
 VP NOM INDEF.TR.SUBJ-招く CONP それ ために
 arki **shiri**] wen iyokunnure a-ki kane.
 来る CONP 悪い 驚き INDEF.TR.SUBJ-する VP
 「（幌尻岳の神によって）神である者は今にも殺さるところであったが、（幌尻岳の神は）招待されるとやって来たので私はとても驚いた（shiri は「幌尻岳の神が来た」という事象の視覚的認識を表す）」（金成・金田一 1959: 367）

² 金田一・知里（1936: 155-165）は名詞化辞が接続助詞として用いられると記述している点で注目すべきものといえる。ただし、金田一・知里（1936）は副詞節と補文節を区別していない。そのため、名詞化辞の用法の記述としては不正確である。

- (6)

somo	ibe	no	[e-tumsak	shiri]
NEG	食べる	CONP	2SG.SUBJ-力を欠く	CONP
[rametok	temkor	koyaitekani	e-ki	shiri]
勇者	腕の中	みずから手を取る	2SG.SUBJ-する	CONP
chituyashkarap		e-ekarkar-an		yakka
憐れむ		2SG.OBJ-する-INDEF.INTR.SUBJ		CONP
tane	anakne	ene	a-kar	i
今	TOP	このように	INDEF.TR.SUBJ-する	NOM
ene	a-ye		i	isam.
このように	INDEF.TR.SUBJ-言う	NOM		無い

「あなたは食事もせず力の無い様子であるのに、勇者の元へ向かっていくことを憐れに思うが、今はどうすることも何を言うこともできない (shiri は「主人公ががやつれた姿で戦いに行く」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1961: 144)

- (7)

kamui	shiri	ne	okai	wa	semash
神	様子	CMP	いる	CONP	大したことのない
sheshserke	koseutkanrikin		kane	iki	aine
すすり泣き	背骨を高く上げる		VP	する	CONP
[hebuni	shiri]	shiso	ta	am	be
顔を上げる	CONP	右座	CMP	いる	者
kurkashike	itakomare	ene		okai	i.
上	言葉を発する	このように		ある	NOM

「(妹は) 神の如き様子で大袈裟なすすり泣きをしたあげく、顔を上げると右座にいる者へ目を向けてこのように言った (shiri は「妹が顔を上げる」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1963: 175)

- (8)

[Shupshupkami		a-wenyup-i	oar	atusa
シュプシュプカミ		INDEF.TR.SUBJ-悪い兄	まったく	裸である
shiri]	Ishkar	ta	ek	wa
CONP	石狩	CMP	来る	CONP
				INDEF.OBJ-共にいる

「シュプシュプカミ (人名)、悪い兄が裸で石狩に来て私と一緒にいる (shiri は「兄が裸である」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1963: 353)

- (9)

terke	tuika	ta	iki	korkaiki
跳ねる	上	CMP	する	CONP
[a-tureshipo		shimoipa	shiri]	shiyoro
INDEF.TR.SUBJ-妹		奮闘する	CONP	驚く
a-yaikore.				心
INDEF.TR.SUBJ-みずからに与える				

「跳躍しながらではあるが、私は妹の奮闘する様子に驚きの気持ちを抱いた (shiri は「妹が奮闘する」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1964: 282)

- (10) [a-kor rorumbe kashi chiobash e-i-y-ekarkar
 INDEF.TR.SUBJ-持つ 戦い 上 走る 2SG.SUBJ-INDEF.OBJ-EPEN-する
shiri] shino nupetne-an.
 CONP まことに 喜ぶ-INDEF.INTR.SUBJ
 「(ニショルンサンタ (地名) の兄が) 私の戦いの救援に駆けつけてくれてまことに嬉しい (shiri は「兄が救援に来了」という事象の視覚的認識を表す)」(金成・金田一 1966b: 221-222)

3.2 副詞節のマーカ―としての humi

副詞節のマーカ―としての humi の例を以下にあげる。

- (11) a-kor huchi ye kushkeraibo keshto an ko
 INDEF.TR.SUBJ-持つ 祖母 言う CONP 毎日 ある CONP
 [sonno keran ibe batek a-ki **humi]**
 本当に 美味しい 食事 AP INDEF.TR.SUBJ-する CONP
 shino nubetne-an
 まことに 喜ぶ-INDEF.INTR.SUBJ
 「祖母が言ってくれたおかげで、私は毎日美味しいものばかりを食べてまことに嬉しい (humi は「食事が美味しい」という味覚を表す)」(金成 forthcoming)

3.3 副詞節のマーカ―としての ruwe

副詞節のマーカ―としての ruwe の例を以下にあげる。

- (12) shukup menoko shukup matkachi a-ne wa
 年若い 女性 年若い 少女 INDEF.TR.SUBJ-である CONP
 [kamui turano chiyainikoroshmare
 神 CMP みずから恥をかく
 a-i-y-ekarkar **ruwe]** yayekatuwen
 INDEF.TR.SUBJ-INDEF.OBJ-EPEN-する CONP みずから恥じる
 a-ki kusu sonno am be
 INDEF.TR.SUBJ-する CONP まことに ある NOM
 a-yaikeuorochiwe kuni a-ramu korka,
 INDEF.TR.SUBJ-みずから身を棄てる CONP INDEF.TR.SUBJ-思う CONP
 「私は若い女性、若い娘であるのに、神々とともに恥辱を与えられて恥ずかしく思い、身を投げ棄てようと思ったが (ruwe は「恥辱を受けた」という確定的な認識を表す)」(金成・金田一 1959: 177)

- (13) Kemkakarip hawokai awa itak hetapne
 ケムカカリプ 言う CONP 言葉 AP
 okai kuni a-ramu awa,
 ある NOM INDEF.TR.SUBJ-思う CONP
 [pon menoko shiretok kor ruwe]
 小さい 女性 美貌 持つ CONP
 shiyor keutum a-yaikore,
 驚く 心 INDEF.TR.SUBJ-みずからに与える
 「ケムカカリプ（人名）が言ったが、口先だけだろうと思ったのに、若い女性の美しい
 様子には私は驚嘆した（ruwe は「女性が美貌である」という確定的な認識を表す）」
 （金成・金田一 1964: 205）

3.2 副詞節のマーカーとしての hawe

副詞節のマーカーとしての **hawe** の例を以下にあげる。

- (14) ouse shine pakesh kusu tumi ne yakka
ただ 一つの 飲みさし CMP 戦い である CONP
[orsaureko a-i-koashi **hawe**]
激しく INDEF.TR.SUBJ-INDEF.OBJ-立つ CONP
sonno irushka-an koroka,
まことに 怒る-INDEF.INTR.SUBJ CONP
「ただ一杯の飲みさしのために激しい戦いを起こされて、私は激しく怒ったが (hawe
は「酒宴での出来事が原因となって戦いを起こされた」という事象の伝聞を表す)」
(金成・金田一 1959: 164)

上記のように、証拠性に関わる四つの名詞化辞は副詞節のマーカーとしても用いられる。また、証拠性に基づく意味の対立は、副詞節においても存在するものといえる。

4. 証拠性を表す名詞化辞の文法化

アイヌ語の証拠性を表す名詞化辞は、以下のように、名詞からの文法化 (grammaticalization: Hopper and Traugott 1993) によって形成されたものであることが推定されている (金田一 1931、金田一・知里 1936、田村 1988)。

siri 「(周囲の) 様子」(名詞) > siri 「視覚による認識」(名詞化辞)
 humi 「音、身体感覚」(名詞) > humi 「視覚以外の感覚による認識」(名詞化辞)
 ruwe 「道、跡」(名詞) > ruwe 「証拠に基づく確定的な認識」(名詞化辞)
 hawe 「声」(名詞) > hawe 「発声による認識」(名詞化辞)

この文法化に加え、幌別方言では以下の変化が生じたと推定される。

siri「視覚による認識」(名詞化辞) > siri「視覚による認識」(接続助詞)
 humi「視覚以外の感覚による認識」(名詞化辞) > humi「視覚以外の感覚による認識」(接続助詞)
 ruwe「証拠に基づく確定的な認識」(名詞化辞) > ruwe「証拠に基づく確定的な認識」(接続助詞)
 hawe「発声による認識」(名詞化辞) > hawe「発声による認識」(接続助詞)

この文法化は、副詞節のマーカーが関与する文法カテゴリーとして、証拠性が新たに取り入れられるプロセスと理解することができる。なお、副詞節には、アスペクチュアリティーやモダリティーに関わる情報が含まれる場合がある。

- (15) “pon a-kor yub-i uitek kuru
 小さい INDEF.TR.SUBJ-持つ 兄-POSS 使用する 人
 i-koimekare shiri ne yakun pon
 INDEF.OBJ-食物を分ける NOM である CONP 小さい
 a-kor yub-i i-koimekare kun i
 INDEF.TR.SUBJ-持つ 兄-POSS INDEF.OBJ-食物を分ける VP NOM
 korachi an ruwe ne.” ari itak kane uina wa
 CMP ある NOM である QP 言う CONP 取る CONP
 [emina rusui koro] e.
 笑う VP CONP 食べる

「(イヨチウンマッ(人名)は)『年若い兄の使用人がご馳走を分けてくれるならば、年若い兄が分けてくれるようなものだ』と言って受け取り、笑いを堪えながら食べた(koroによって「笑いを堪えながら」という進行を表す副詞節が形成されている)」(金成・金田一 1966a: 212)

- (16) [sapa ne kotom] a-ramu kamui utara
 頭領 である CONP INDEF.TR.SUBJ-思う 神 たち
 otu sanashke ore sanashke ukaenoiba
 二つの 手 三つの 手 揉み手をする
 tuwan onkami rewan onkami ukakushpare
 二十の 拝礼 三十の 拝礼 繰り返す

「頭領であるらしく思われる神々は何度も揉み手をして、二十の拝礼、三十の拝礼を繰り返した(kotomによって「頭領であるらしく」という推測を表す副詞節が形成されている)」(金成・金田一 1959: 212)

上記の文法化は、アスペクチュアリティーやモダリティーに加えて、副詞節において実現しうる文法カテゴリーを多様化させる変化といえる。この問題は、アイヌ語の従属節の統語論的な性格を考察する上で重要なものと考えられる。

また、言語類型論的観点からは、上記の文法化は多用途的名詞化 (versatile nominalization: Noonan 1997) の顕著な例と考えることができる。すなわち、この現象はアイヌ語の構造的類型を考える上でも示唆に富むものといえる。

5. おわりに

本稿では、アイヌ語幌別方言の証拠性に関わる名詞化辞について分析をおこない、補文節と副詞節のマーカーとしての用法がみられることを述べた。さらに、文法化という観点から上記の現象について考察をおこなった。アイヌ語において、文法化の研究は今後の課題といえる。特に、文法化の研究において、方言的多様性に注目することは有意義であると考えられる。今後、諸方言の記述的研究が進展することにより、文法化に関して多くの知見が得られるものと思われる。

略号

1: first person, 2: second person, AP: adverbial particle, CMP: case marking particle, CONP: conjunctive particle, EPEN: epenthesis, FP: final particle, INCL: inclusive, INDEF: indefinite, INTR: intransitive, NEG: negation, NOM: nominalizer, OBJ: objective, PL: plural, POSS: possessive, PRON: pronoun, QP: quotative particle, SG: singular, SUBJ: subjective, TOP: topic marker, TR: transitive, VP: verbal particle

参考文献

- Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- 浅井亨 (1969) 「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」アイヌ文化保存対策協議会 (編) 『アイヌ民族誌』 下: 771-800. 東京: 第一法規.
- Chafe, W. and Nichols, J. (eds.) (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, NJ: Ablex.
- 知里真志保 (1942) 「アイヌ語法研究」『樺太庁博物館報告』 4(4) (『知里真志保著作集』 3. 455-586. 東京: 平凡社, 1973 所収) .
- Hopper, P. J. and E. C. Traugott. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 金成まつ (forthcoming) 『アイヌ叙事詩: 鳥のさえずり』 札幌: 北海道教育委員会.
- 金成まつ・金田一京助 (1959) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 1. 東京: 三省堂.
- 金成まつ・金田一京助 (1961) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 2. 東京: 三省堂.
- 金成まつ・金田一京助 (1963) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 3. 東京: 三省堂.
- 金成まつ・金田一京助 (1964) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 4. 東京: 三省堂.
- 金成まつ・金田一京助 (1966a) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 6. 東京: 三省堂.
- 金成まつ・金田一京助 (1966b) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 7. 東京: 三省堂.
- 金田一京助 (1931) 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 第2巻. 東京: 東洋文庫.
- 金田一京助・知里真志保 (1936) 『アイヌ語法概説』 東京: 岩波書店 (『知里真志保著作集』 第4巻, 東京: 平凡社, 1974 所収) .

- Noonan, M. (1997) Versatile nominalizations. In J. Bybee, J. Haiman and S. A. Thompson (eds.) *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to T. Givón*. Amsterdam: John Benjamins. 373-394.
- Refsing, K. (1986) *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*. Århus: Aarhus University Press.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典』 1: 6-94. 東京: 三省堂.

Grammaticalization of Nominalizer in the Horobetsu Dialect of Ainu

Yasushige TAKAHASHI

(Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University)

This paper analyzes evidential nominalizer in the Horobetsu dialect of Ainu. In the dialect, evidential nominalizer may function as a marker of complement clause and adverbial clause. This versatile nominalization may be interpreted as the grammaticalization of evidential nominalizer.

(たかはし・やすしげ takahashi@let.hokudai.ac.jp)